

思

考

の

隅

景

とジャック・デリダのあいだに、これも事前の打ち合わせの有無はよくわからぬままに、突如両者の地元自慢よろしく、松阪牛とフォア・グラはどちらが優れているか、という議論が始まった。ともに人工的に脂肪を蓄えさせることで完成される、人間の勝手な欲望が生み出した食肉用畜産技術。フォア・グラでは、脂肪は肝臓に一点集中する。これにたいして松阪牛では、脂肪は牛の肉質全体に散ってしまっ、もはや局所に限定出来ない。フォア・グラが中心指向がモダンな時代につきものの構築的意志の表現だったとすれば、拡散の極みにある松阪牛の霜降りこそは、脱構築の実現であり、当時流行のポスト・モダンにぴったりの比喩。これには脱構築の旗手デリダも、見事に一本取られた、といった演出となり、会場は爆笑に包まれた。

それからいつしか16年の歳月が流れた。フォア・グラから松阪牛そして茶碗蒸へ。はたして理論研究は進歩を見せたのだろうか。人種の坩堝説がサラウ・ボウル説へと軌道修正された多民族国家たる北米合州国。そこに籍を置く、ボンベイ・パルサイ共同体出身の、根っからの少数派、そして根無し草たるホミ・バーバ。彼にとってそのシェイクスピアからオーデン、テレック・ヴォルコットに至る膨大な文学的素養は、茶碗蒸のなかでどんな絵柄を描くのか。素材は雑多でも、つなぎの味に、受け入れ側の姿勢が見て採れる。北米文学がどのように日本的に味付けされ、えり好みされてきたかの齟齬は、小谷野敦の近著、『聖母のいない国』（寄土社）が、山椒味を利かせて軽妙に語っている。そんな気楽な感想を枕に、講演者とも、しばし歓談の機会を得た。『悪魔の詩』の日本語訳者が殺害された事件も、ホミはちゃんと知っていて、五十嵐一（ひとし）を巡る深刻な話題まで共有できた。記して、主催者に感謝したい。

*ホミ・バーバ講演「グローバル・メジャー」立命館大学国際言語文化研究所にて。2002年6月29日。

茶わん蒸し文化論

ポストコロナ理論における素材と繋ぎそして味付け

ホミ・バーバの初来日、初講演に接した。当方としては、サルマン・ラシュディの『悪魔の詩』がアヤトラ・ホメイニーによって弾劾された1989年の事件（岩波書店『イスラーム辞典』拙解説を参照）で、北米の大学人中、唯一意味のある論評をしていたことで注目した人物である。「この小説は、いまや空疎な象徴と化した。西側の自由なる意識というものの囚人でもあれば、イスラーム原理派の正統性の捕虜でもあるような、象徴に」と語る明晰さをバーバは示していた。その後有名になった彼は、やがて「最悪の英語で書く教授」といった不名誉な烙印を押されたりもするのだが。講演会案内には「ポスト・コロナ理論」の「もっとも果敢な理論的リーダー」とある。現ハーヴァード大学教授。『国家と語り』[Narrationという言葉遊び] 1990) につづく『文化の位置』(1994) が法政大学出版局より近刊とのこと。

講演の内容は、原文引用不可、会場で配られた翻訳も、著作権の問題があるため、ここでは触れられない。その代わりぜひ触れたいのが、突如登場した、茶碗蒸の話だ。現在の世界では、もはや自文化固有の要素のみでできた社会など存在せず、多様な起源をもった要素が混在する。そういえば、とホミはややおら脱線。昨夜食べた、あの解き卵が椀にはいったのは何だ？ その場に居合わせなかった通訳の本橋哲也としばしのやり取りがあって、司会の中川成美が、あ、茶碗蒸、と助け舟を出した。そう、それだ。日本文化は茶碗蒸で、様々な素材が、卵をベースにした和風だしのつなぎの中に浮いている。そしてこれこそ現代世界の縮図である、という珍説(?)が、いかにも即興といった面持ちで、ひとしきり展開された。

とたんに思い出した光景がある。1986年のことだったか、パリはボンビドー・センターで『日本の前衛』という展覧会が開催されたおりのシンポジウム。当時はまだ元気だった中上健次

パ

軌

国際日本文化研究センター 研究員・
総合研究大学院大学助教授
稲賀繁美

思想